

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

フォーラムとしてのミュージアム、その後

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 憲司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5560

文・写真 吉田憲司

よしだ けんじ

文化資源研究センター教授。博物館人類学専攻。主な著書に、『仮面の森——チェフ社会における仮面結社、邪術、憑霊』（講談社 1992 年）、『文化の発見——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』（岩波書店 1999 年）、『博物館概論』（編著 放送大学教育振興会 2011 年）、『文化の肖像——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』（岩波書店 2013 年）など。

はじめに

「フォーラムとしてのミュージアム」。私がこの表現を最初に紹介したのは、1994 年、民博の創設 20 周年記念シンポジウム「21 世紀の民族学と博物館——異文化をいかに提示するか」というシンポジウムの中であった。このシンポジウムは、民博にとっても、また日本の文化人類学の分野にとっても、「博物館」をテーマにした最初のシンポジウムであった。その後、同様の問題意識をもったシンポジウムが、歴史学、美術史学、地理学といった分野でも開かれるようになる。そして、その議論のなかで、「フォーラムとしてのミュージアム」というコンセプトが、しばしばとりあげられるようになっていく。

この「フォーラムとしてのミュージアム」という用語を最初に用いたのは、美術史家のダンカン・キャメロンである。キャメロンは、1974 年の段階で、「テンプルとしてのミュージアム」と「フォーラムとしてのミュージアム」という語を用いて、博物館・美術館のあり方の類別を試みた（Cameron 1974）。テンプルとしてのミュージアムとは、すでに評価の定まった「至宝」を入びとが「拝みにくる」神殿のような場所、一方、フォーラムとしてのミュージアムとは、未知なるものに出会い、そこから議論が始まる場所という意味である。私は、上掲のシンポジウムの中で、このキャメロンの議論を紹介し、これからの博物館はますますフォーラムとしての性格を強めるだろうと述べた。その後二十数年、世界の博物館はまちががなくテンプルである以上にフォーラムとしての性格を色濃く帯びようになってきている（吉田 1999；2013）。

公共博物館の歴史が 1753 年の大英博物館の創設（開館は 1759 年）から始まるとすれば、現在はそれから 250 年。われわれは今、後世から見れば、博物館の歴史のな

かで、最初の大きな転換点に立ちあっているにちがいない。これまで一方的に収集・展示する装置であった博物館が、展示される側、そしてその展示を見る側、展示する側とのあいだで、双方向・多方向の交流を生み出す装置として活用されるようになった時代。そのような時点に、今われわれは立っているように思われる。

展示する側と展示される側の共同作業

〈展示における博物館と文化の担い手との共同〉

アメリカ・ワシントンにある、スミソニアン協会・国立アメリカ・インディアン博物館では、展示を先住民コミュニティ単位で構成し、それぞれのコミュニティに属する人びとの手で展示を作ってもらう、という仕組みをとっている。各展示コーナーの入り口には、その展示にかかわった先住民コミュニティ出身のキュレーターが顔写真入りで紹介されている（写真 1）。展示全体は、「私たちの世界観」「私たちの歴史」「私たちの現代の生活とアイデンティティ」というギャラリーに分かれており、各コミュニティはそのどれに参加するかを自分たちで選択して企画に加わる。また、この構成も含めて数年ごとに全体が入れ替わり、博物館のコレクションを使いながら、順次新たなコミュニティが自分たちを表現する展示を組み立てていくというしかけである。

〈民博のアフリカ展示〉

国立民族学博物館（民博）では、2008 年度から開館以来の常設展示の全面的刷新に取り掛かり、2009 年の 3 月、その先頭を切ってアフリカと西アジアの新しい展示がオープンした。以後、順次、各展示場の更新を進めてきている。民博のこれまでの展示は、諸民族の文化を序列化せず、世界の諸地域の文化の特徴を示すという視点から、主として伝統的な生活用具に焦点をあて、そのバリエーションを大量の展示物で紹介するというものであっ

た。従来のアフリカ展示もその例外ではない。それは、見る者を圧倒する迫力をもったものであったが、モノは大量に並んでいるものの、それを生み出し、日々使っている人びとの実際の暮らしぶりが見えない、という批判も耳にした。おそらく刷新前の民博の展示は、20世紀の文化人類学が標榜してきた文化相対主義的な民族誌展示を、世界でもっとも徹底的に実現したものと位置づけられる。しかし、それはまた、地域の独自性ばかりを強調し、それぞれの地域があたかもそれ自体で閉じ、独特の文化だけをもっている、といったイメージを作り上げてしまったという点も否めない。実際には、世界のどこの文化も外の世界とつながりをもち、日々変化してきた。そうした反省に立ち、新たに構築する展示では、

- ・ 地域と世界、地域と日本のつながりがわかる展示
- ・ 歴史的展開の結果としての現代を示す展示
- ・ 同時代人としての共感をはぐくむ展示
- ・ 展示する側と展示される側の共同作業による展示

を目指すことにした。展示する側と展示される側の共同作業という点でいえば、私が担当したアフリカに関しては、アフリカの8カ国の博物館や大学の研究者に展示ア

ドヴァイザーになってもらい、3年間にわたって定期的に会合を重ねて展示を作り上げた。

展示の構成としては、基本的に今われわれが生きている現代に軸足を置きながら、まず「歴史を掘り起こす」というセクションで、アフリカの人びとが、今、自分たちで掘り起こそうとしている歴史を現在までたどった後、現代のアフリカの様相を、「働く」「憩う」「装う」「祈る」という4つのセクションで紹介することにした。「歴史を掘り起こす」のセクションでは、文明の誕生から王国の成立、植民地経験、そして独立・アパルトヘイト撤廃という現在までの流れをたどっている。

その後、現代の4つのセクションが続くことになるが、今回の展示で、とくに新しい試みとして私自身がこだわったのは、「働く」というコーナーの展示である。従来のアフリカ展示では、農耕民や牧畜民、狩猟採集民といったように、生業の区別をもとに、その社会を描いてきた。しかし、現代のアフリカでは、たとえば、農耕を主な生業としている社会でも、農閑期になると男たちはほぼ100%町に出稼ぎに出て賃労働に従事する。そうでないと、現金収入が得られないからである。そういった人びとを「農耕民」という言葉でひと括りにして語れるものだろうか。そこで、新しい展示では、一人一人の個人に焦点をあて、顔写真とともにその人物が実際に労働に使っている道具の実物を取りつけた等身大パネルを用意し、動画やメッセージ文のなかで、それぞれの人物に自分の「仕事」についての思いを語ってもらうことにした(写真2)。具体的な名前をもった個人として私たちと同じ



写真1 スミソニアン協会国立アメリカ・インディアン博物館における「サンタクララのプエブロ」の展示を作り上げたコミュニティのメンバーたち。「私たちの世界観」のセクションを構成する展示のひとつ(2009年)。



写真2 民博の新しいアフリカ展示場、「働く」のコーナー。顔写真とともに、その人物が実際に自分の仕事に使っている道具の実物をとりつけた等身大のパネルが並ぶ。動画やメッセージ文のなかで、それぞれの人物が自分の仕事についての思いを語る（2010年）。

時代を生きているアフリカの人びとの姿を浮かび上がらせようとしたのである。同時代人としての共感をはぐくむ展示として、この手法は、新しい民族誌展示のひとつの方向性を提示できたのではないかと秘かに自負している。

〈博物館資料の共同管理〉

展示というかたちの収蔵資料の活用だけでなく、収蔵資料の管理についても、博物館の職員以外のさまざまな立場にある人びとの参加が図られてきている。博物館が管理している資料の情報を、その資料のもともとの所有者、つまりその資料を生み出した当の社会の人びとと共有し、それらの人びとの手でさらなる情報を付加できるようにすることで、博物館の資料情報は飛躍的に充実したものとなる。カナダ・バンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学の人類学博物館が、バンクーバーでの冬季オリンピックの開催に合わせて立ち上げたRRN（Reciprocal Research Network、相互研究ネットワーク）は、その先駆的な例である。この博物館は、とくにカナダ北西海岸の先住民関係の資料を数多く所蔵していることで知られる。RCCのプロジェクトでは、ブリティッシュ・コロンビアの先住民族関係の収蔵品についてのデータベースを公開し、研究者と先住民コミュニティの人びとが共同でコレクションについての情報の付加、研究、そして展示などの企画立案をおこなっている。いわば、インターネットを通じて、博物館のコレクションをそのコレクションの本来の所有者である先住民コミュニティに開放するものといってよい。私の旧友でもある同

館館長のアンソニー・シェルトンによれば、ある先住民コミュニティのメンバーは、このRRNのシステムを、ヴァーチャルな形での文化遺産の返還の行為だと評したという（Shelton 2009: 4）。

イギリス・オックスフォード大学のピット・リヴァーズ博物館が実施した写真データベース構築プロジェクト「チベット・アルバム——チベット中部で英国人が撮影した写真1920-1950」も、同様の目的をもったものである。ピット・リヴァーズ博物館と大英博物館が所蔵するチベット関係の写真約6000点をデータベース化し、ウェブ上で広く公開するとともに、それを通じて得られた写真についての情報をチベットの人びとの手で逐次付加してもらうというプロジェクトである。チベットとそのディアスポラにいるチベット人にとって、自らの歴史とアイデンティティの再構築、継承に重要な役割を果たすとして、プロジェクトの立ち上げに際しては、ダライ・ラマも同博物館を訪問している。博物館が所蔵する資料や写真をめぐるこうした動きは、今後、各地で展開されていくと思われる。

展示する側と展示される側、展示を見る側の共同作業

〈スミソニアンを試み——「記憶の共有」展〉

収集・展示する側と収集・展示される側の協働だけでなく、それらのコレクション・展示を見る人びと、つまり利用者をも巻き込んだ博物館活動も活発化している。

そうした活動のさががけとも言えるものが、国立アメリカ歴史博物館での1995年の展示「第2次世界大戦、記

憶の共有」である。展示を担当したスティーヴン・ルーバーは、この展示において、記憶と歴史の両方によってわれわれが過去を理解できる方法の実験を試みた。それは、観客とともに、過去の出来事の意味を探り、解釈するという試みであった（Lubar 1997）。

展示は、「銃後の守り」「戦場」「記念物と記憶」といったセクションから構成され、展示物には、来館者の多くが身のまわりにもっていたであろう品が選ばれた。たとえば、「戦場」のセクションの「彼らがもっていたもの」コーナーで並べられたのは、キャンディ、ガム、写真、ガールフレンドの写真などであった。そこから、米兵が戦ったのは、神や国家のためでなく、アップルパイやガールフレンドのためだったことを示唆しようとしたという。「戦争の道具」のコーナーでは、使用された銃やヘルメットが展示されたが、あえて特定の場に結びつく戦闘場面の写真は避け、戦場を描いた

ビル・モールドインの絵画のシリーズが展示された。しかし、展示の主役は、じつはその展示を見た観客の感想だった。展示室には、テーブルと椅子が並べられ、表紙に「記憶の共有」と書かれたノートが用意された。観客は、熱心にそのノートに個人的な戦争の記憶を書き込んでいった。それは誰もが読めるとともに、いくつかの書き込みは順次、掲示板に掲示された。

この展示は、観客に、記憶と歴史が複雑に絡み合っていることを実感させた。ルーバーは言う。「記憶を通じて、戦争は個人のものとなり、現実のものとなる。歴史というプリズムだけでなく、記憶というプリズムをも通

してみることで、過去についての、より十全で公正で興味深い像を手に入れることができるだろう」（Lubar 1997：27）。

博物館の歴史展示は、その展示を見る個々人の展示への参画を促すことで、個人の記憶に裏打ちされた、豊か

で、しかも開かれた歴史像を築きあげることができるという主張である。

〈ホタルダス〉

日本でも注目される活動がみられる。滋賀県立琵琶湖博物館がその開館前からおこなっていた「ホタルダス」というプロジェクトである。これは、市民参加型の調査・展示プロジェクトのモデルとして、内外からの関心を集めた事業である（水と文化研究会 2000）。

このプロジェクトには、1989年から10年にわたり延べ3000人の市民が参加した、琵琶湖周辺におけるホタルの生息調査であるが、その調査を通じて、市民のあいだに水環境についての

問題意識が定着するとともに、新たな科学的知見を蓄積することにもつながったという。同様の市民参加型プロジェクトは、その後も続けられているが、いずれも、調査の段階から市民が参加し、博物館の学芸員と共同でデータベースや展示を作り上げていくのが特徴である。その作業を通じて、科学知とローカルな生活知との対話と交流が生まれ、参加者のあいだに科学知について新しい視点が生まれるとともに、専門家が見落としがち新たな知の掘り起こしにもつながっているという。市民が集う場としての博物館を活用した知の構築の例として、特筆すべき事例である。



写真3 大英博物館のアフリカ展示場に立つ、TAEによる作品「生命の木」（2010年、筆者撮影）。

接触の場の可能性——「生命の木」から「家族の輪だち」へ

立場を異にする人びとの接触と啓発の場としての博物館のあり方を「コンタクト・ゾーン」と呼んだのは、ジェイムズ・クリフォードであった（Clifford 1997: 207, 213）。事実、博物館における展示物との出会いが、世界を変える新たな行動につながったという例もみうけられる。モザンビークにおける TAE（Transformação de Armas em Enxadas）「武器を農具に」と呼ばれるプロジェクトの展開がそれである。

モザンビークでは、1975 年の独立後 92 年まで続いた内戦の結果、戦争終結後も大量の銃器が民間に残された。TAE のプロジェクトは、こうした武器を農具や自転車などと交換するかたちで回収して武装解除を進めるとともに、その回収された銃を用いてさまざまな立体美術作品を生み出すというものである。内戦後の平和構築のモデルとして注目を集めている。地元のアーティストたちの手で制作された作品は、2005 年に大英博物館によって収集され、民博でも先ごろ収集したところである。

この TAE の活動は、モザンビーク聖公会のディニス・セングラーニ司教が創始したものである。司教は、内戦終結後、国内を広く回るなかで大量の武器が民間に残されているという事実を目の当たりにし、聖書にある「剣を鋤に」という章句をヒントに、その武器を農具と交換

して武装解除を進めることに思い至った。さらに、その回収された武器を分解し部材として用いてアート作品を制作・公開することで、平和を人びとのあいだに定着させたいと、このプロジェクトを始めたという。現地では TAE の作品は、街角や、国会議事堂前、またホテルの中庭などに展示されている。

2012 年の 5 月 26 日、セングラーニ司教を招き、民博でシンポジウム「アートと博物館は社会の再生に貢献するか？」を開催した。議論のなかでは、TAE のプロジェクトによる作品“Tree of Life”「生命の木」（写真 3）をいち早く収集・展示した大英博物館のクリス・スプリングから、同館の展示場が、平和へのメッセージの発信基地となっていることが報告された。2012 年 1 月、大英博物館で「生命の木」を目にした南スーダン文化省次官のジョク・マドゥットが、同国でも TAE と同様の活動を展開して平和構築の一助としたいと考え、セングラーニ司教との会談を希望した。クリスからの連絡を受け、私は、それならば「日本でお引き合わせしましょう」と、マドゥットも民博でのシンポジウムに招聘することにした。残念ながら本国での公務の都合で来日は実現しなかったが、マドゥットはシンポジウムにメッセージを寄せてくれた。すでに、回収した武器を用いたモニュメントの制作は、南スーダンで始められたという。結果的に、日本でのシンポジウムが、モザンビークからスーダンへの平和構築活動の橋渡しの場となった。それが実現したのも、アートという目に見える指標と、人びとが集う博物館という場の存在のゆえである。「アートや博物館は、人びとの『心の武装解除』に貢献できる」。シンポジウムの場での、セングラーニ司教の言葉である。

2012 年に民博で収集した作品については、



写真 4 民博での展示に向けた TAE による作品「家族の輪だち」の制作風景（2012 年）。

2011年11月に、私自身が現地を訪れ、アーティストたちとともに、日本の観客に向けて、どのような作品にするかの想を練った。TAEのプロジェクトにおいて、武器は農具や自転車などと交換されるが、とくに自転車に関しては、松山に本拠をもつNGO「えひめグローバルネットワーク」が国内で集めてモザンビークに送っている放置自転車が交換の対象になっている。武器を捨てた男たちのなかには、「武器を持っているあいだは、妻も子供たちも自分を恐れて近くへ寄ってこなかった。武器を捨てて、妻も子供たちも、私を改めて愛してくれるようになった」と告白する者もいる。そこで、自らの意思で武器を捨て、平穏な家族との時間を取り戻した人びとの生活を、武器と交換して得た自転車に乗る家族の姿で表現しようということになった（写真4）。タイトルは“Cycle of family life”「家族の輪だち」とつけた。2012年の10月、私もたちあって制作し、2013年の秋には、民博の展示場で公開する予定である。作品の設置は、制作にあたってくれたフィエル・ドス・サントスとケスターの2人のアーティストの手でおこなってもらうことにしている。

大きな潮流

本稿では、日本と世界の博物館の現在のあり方を見渡してきた。もとより、この場でそのすべてを総覧したとは言えない。しかし、ここでとりあげた例からだけでも、これからの時代の博物館と、博物館に所蔵されるモノをもともと生み出したコミュニティや社会との関係について、ひとつの明確な像が結ばれつつあることが確認できるであろう。それは、博物館というものは、その所蔵品の最終的な所有者でなく、むしろ“Custodian”「管理者」であり、本来の制作者や所有者、利用者とのあいだでのさまざまな共同作業をおこなう場だという認識で

ある。

科学や普遍的とされる価値を背景に固定的な表象を一方的に生み出すという、これまでの博物館のあり方に対する見直しは、今、各所で進んでいる。住民参加を基調とするコミュニティに根差した博物館活動の実践、展示される側との共同作業を前提とした展示作業の推進、観客の記憶の想起を重視する歴史展示の実現、さらには、所蔵する資料の情報を多くの人と共同で充実させ活用していこうとするデータベースの構築。そのいずれもが、これまで一方的に情報を発信するという権力的装置であった博物館が、双方向・多方向の交流と情報の流れを生み出すものとして改めて活用されてきている、という構図を見て取ることができるであろう。

博物館を単に過去のモノの貯蔵庫や一方的な表象の装置としてではなく、そこに立場を異にするさまざまな人びとが集い、相互の交流と啓発を重ねるなかで、過去の文化を創造的に継承し、新たな文化と社会を構築する装置として活用すること。すでに、博物館は、地球規模で、その方向に向いて大きく動き出している。

【参考文献】

- 水と文化研究会編 2000『みんなでホテルダス——琵琶湖地域のホテルと身近なミス環境調査』新曜社。
- 吉田憲司 1999『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店。
- 2013 [近刊]『文化の肖像——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』岩波書店。
- Cameron, Duncan 1974. The Museum: a Temple or the Forum'. *Journal of World History* 4(1): 189-202.
- Clifford, James 1997. *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Harvard University Press. (ジェイムズ・クリフォード 2002『ルーツ』毛利嘉孝ほか訳 月曜社。)
- Lubar, Steven 1997. Exhibiting Memories. In Amy Henderson and Adrienne L. Kaeppler (eds.) *Exhibiting Dilemmas: Issues of Representation at the Smithsonian*. Smithsonian Institution Press.
- Shelton, Anthony 2009. Director's Foreword. In Carol E. Mayer and Anthony Shelton (eds.) *The Museum of Anthropology at the British Colombia University*. The Museum of Anthropology at the British Colombia University.